

京都市中京区明倫・城巽学区フィールドワーク

□フィールドワークの目的

大都市都心研究会では京都の都心部のコミュニティ調査という位置づけで、明倫学区および城巽学区の住民を対象に質問紙調査を行っている。また、同研究会では今秋に東京都中央区を対象としたコミュニティ調査（以下、東京調査）の実施を予定している。筆者は東京調査の担当であり、今後、地区の選定や実査を行うことになっている。今回の明倫・城巽学区のフィールドワークは東京調査の参考のために行うものである。

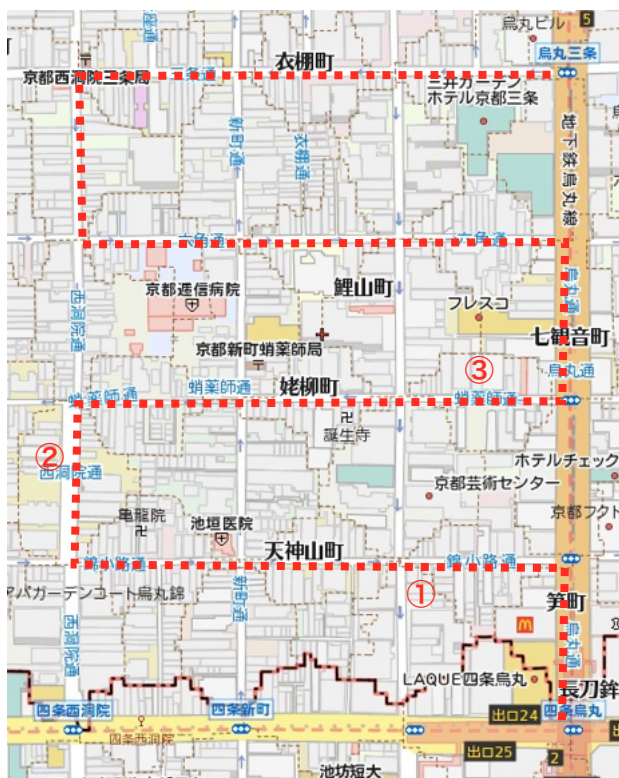
□フィールドワークの概要

日時：2015年6月21日10時30分～13時

調査者：中野佑一

方法：対象地区を徒歩で回る。

明倫学区におけるフィールドワークの道のり



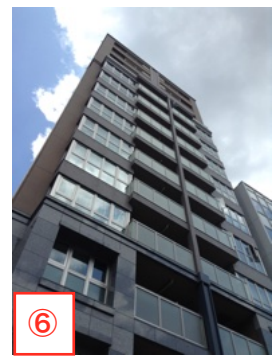
城巽学区におけるフィールドワークの道のり



(※赤丸は写真の番号を示す)

□明倫学区

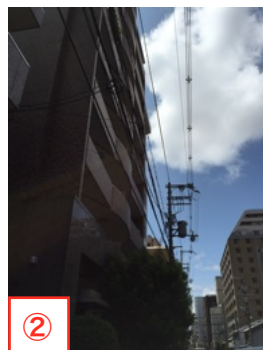
明倫学区は京都市の中心業務地区に隣接しており、事業所が数多く所在している（①）。近年、中層のマンションの建設が進められている（②）が、古くからの建造物も残存している（③）。



□城巽学区

城巽学区の北側は低層の住宅地や商店が混在している地区であり、古くからの建物が残存している（④）。ただし、城巽地区を南北に2つに分けている御池通の両側には15階程度の中高層のマンションが建設されている（⑤）。また、堀川通の東側にも同規模のマンションが建設されている（⑥）。多数のマンション住民が新住民として城巽学区に移動してきたことがわかる。

城巽学区の南側にも古い建物が残っている。入口を共有する長屋形式の住宅も見られた（⑦）。また、ある事業所の窓には祇園祭のポスターが貼られており、祭りに対する意識の高さうかがえる（⑧）。町家風の建物と築40年近い建物が混在している（⑨）。城巽学区は新住民が増加する一方で、古くから住む人々のコミュニティの強さを想像することができる。



□おわりに

今回のフィールドワークによって、明倫・城巽学区が中心業務地区に隣接する旧市街に位置しており、古くから残っている建造物と新しく建設されたマンションが混在している地区であることが体験的に理解できた。東京調査の地区選定に向けて参考にしたい。